

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (八)

名古屋市立大高幼稚園



お月さま

きょう帰りに、お月見の話をしていたら、しげひこが、

「うさぎのついたおもちゃが、ばらばらとふってきて、人間は、それを食べるんだよ」という。するとあや子が、

「ちがうよ。うさぎがおもちをついて、

それをお月さまにあげるのだよ」

と反論した。今度はまた、しげひこが、

「そんなバカなことがあるか。だってうさぎのついたおもちゃが、月へあがっていくはずはない。ロケットに乗らなきゃ行けないんだぞ」といい返していた。

「でもアポロ十一号が月へ行って見てきたら、うさぎはいなかったんだって」とかよ子がいう。

◇ ◇ ◇

ここに、現実と空想が入りまじっている、子どもの世界をみることができる。教師の心に、いつまでも残るほほえましい、楽しい会話であった。この会話に教師のいる場はないし、はいる必要もない。

(五歳児 九月二十二日)

だんだん生きてきたぞ

しんいちが作ることが好きで、きょうも、「作ってみよう」

と雑誌の付録をみながらねずみを作っていた。はじめに作ったねずみは、いさおにやってしまった。そしてふたつ目の自分用のねずみを作りながら、

「だんだん生きてきたぞ」とひとりごとをいいながら、いっしょうけんめいに作っていた。



だんだん出来上がってきてねずみらしくなってくることを、「生きてきたぞ」ということばでいい表わしているのだが、おもしろい表現であると思った。このことばにはしんいちが製作に打ちこんでいる心の深さがひめられており、そのねずみが、いまにもとび出してくるのではないかとさえ教師には思われたのである。

(五歳児 九月三十日)

もうねこちゃん東京へ帰るの

最近やえ子はぬいぐるみのねこが大のお気にいりで、登園するとすぐそれをかかえる。きょうも、ねこをかかえて鉄棒や砂場で遊んでいた。それから保育室へ帰ってままごをしていった。かたづけの時そのねこを抱いてやってきて、

「このねこちゃん今から東京へ帰るんですよ。そしてあなたもしっかりおかたづけをしなさいっていうんですよ」

とおしえてくれた。かたづけになるともうねこと遊べなくなるといふこの気持ち、ねこを遠くへやるということで、自分の気持ちにきりをつけようとしているのではないかと思われる。

「しっかりかたづけなさい」

とねこがいつているということは、やっぱりかたづけになったらきちんとかたづけなければいけないということが頭ではわかっているのだと思った。

「ねこちゃんが、そういったの？じや、

しっかりかたづけなさいね」

とあいづちをうつ。



ここ数日、やえ子がねこに執着しいつもかかえていることは、何か精神的に不安定

なものがあるのだと思う。ねこを手ばなした時、その不安定がなくなり、落ち着いてきたということがいえるように思われる。

やえ子と特に親しかったきみ子・よしみとの関係が動揺していることが原因のようである。「東京へ帰る」ということは自立しようとする努力している心のあらわれのようにも思われ、ここにやえ子らしさが感じられて、教師も心の中で、「やえ子、がんばれ」と声援をおくった。

(五歳児 十月七日)

ぼくたち友だち

砂場で、かつみ・みねお・なおと・まさやの四人が遊んでいた。四人で小さな池をいくつもつくり、池と池をパイプでつなぐように、くふうしているようであった。水を汲みにいく係や水を流す係、流すところなど、次から次へと話はずんであること

がわかった。そこへのぼるがロボコン（テレビのマンガにでてくるロボット）の絵を持ってきた。一瞬みんながその方へ集まり、

「いいな、のぼるちゃんがかいたの？」

「自分がかいたの？」

などとうらやましい気持ちと感心したような気持ちでしばらくみていたが、

「これは、いさお君にかいてもらったのだよ。ぼくかけないもんね」

と素直に自分でないということをいう。

「あいつは、かくのがうまいなあ！」

「ほんとうだな、天才だな」

「大きくなったら漫画かく人になればいいのにな」

「ロボコンの漫画？」

「ばか！ それまでにロボコン最終回になるにきまつとるがね」

「あつそうか！」

と話をしながらまた自分の遊びにもどっていった。ひとり残されたのぼるは、砂場の

まわりをうろうろしながら

「入れて！」

といっている。砂場の子どもたちは、誰も

「いいよ」と返事をしたわけではなかった

が、ロボコンのことを話し合ったことでの

ぼるはすでに仲間として受け入れていると

いうふんい気であった。みねおは、

「ロボコン、ロボコン」

とリズムをとって、くちざみながら砂も

掘り進めているし、他の子どもたちは、ロ

ボコンのことを話題にして水を流したり、

運んだりしている。



ロボコンのことで同じ気持ちになれると

いうことは、*「仲間だな」*という安心感が

あるのかなあとも思った。いさおが、そこ

にいらなくても他人のよさを素直にみとめら

れることを感じ嬉しく思った。

*「入れて」*といいつて入ったのぼるは、特

に砂遊びをしたいようではなかった。池の

まわりをまわったり浮いている舟にちょっ

とさわったりしているだけである。それを

みてまさやが、*「のぼるちゃん、あんた入*

れてといたけど、ちっとも手が汚れとら

*んがね」*といった。のぼるはそれに対して

「そうだよ、ぼくはただ入りたいたいで、

きょうはよごさんのだもの、そっちは汚れ

*てますね」*といっている。まさやとして

は、いっしょの遊びに入ったのだから、同

じように砂をいじり手がよごれていないと

遊んでいないと思うのだろう。のぼるとし

ては遊びをみて入りたくなったのでなく、

自分の持ってきたロボコンにみんなが注目

してくれたので、なんとなくいっしょにい

たいような気持ちになったのだろうと思っ

た。ふたりの気持ちはびびりしていたなか

ったが、どこかでつながっていることを感

じた。遊びはその後五人のサッカーごっこ

になっていった。この頃になると共通の話

題について話し合うことができるようになる
ってくる。
(五歳児 十月二十九日)

幼稚園やめるもんなあ

遊戯室で積み木あそびをしていたしげおは、保育室へきてみると、みんなが新しい紙ひこうきを折っていたので、自分もその紙をもらって遊戯室へもどっていった。今度はおが、

「しげおくんみたいな紙ちょうだい。」
といいにきた。しばらくするとまたくにおがやってきて、

「けいすけくんも紙がほしいんだって」と紙をとりにきた。教師は以前から、くにおは、しげおや、けいすけのつかいばしりのようなことを、よくやらされているということを感じていたので、

「けいすけくんに、紙がほしかったら自分でとりにいらっしやいといつてね」

とくにおに話し紙をわたさなかった。しばらくするとけいすけがやってきて、紙が入れてある箱をのぞいていた。そのときもう紙は全部なくなっていた。けいすけが紙がほしくてとりにきたということがわかったので、

「けいすけくん、何かいいたいことあるでしょう」

と笑いながら声をかけてやった。その時はいくぶんけいすけをからかうような気持ちもあったし、こういうふうにかかわっていてもけいすけにはじゅうぶん通じるところなのである。しかし、この教師のことはかけに対して何も答えず、

「何だあ、紙なんかないがや」といったような様子をみせてでていってしまった。何となく気になったので、すぐ紙をもって遊戯室へいった。けいすけは他の子どもがひこうきをとばして遊んでいるのを見つとみていた。

「けいすけくん、紙をもってきたよ」といってさしたすと

「先生のはかやろう」

と泣きだしてしまった。そして、積み木の家の中にもぐりこみ

「もう紙なんかいらんわ」

とすねていた。

紙がほしかったのに、先生はくれなかったという気持ちがけいすけの心の中にあり教師が「自分でとりにきて」といったことが、こんな結果になってしまった。「先生のはかやろう」とけいすけにいわれた時、けいすけだったら通じらるだろうと思った対し方が、けいすけの気持ちをきずつけてしまったことを大いに反省したのである。

紙を受けとってくれないので、

「先生、けいすけくんがほしいだろうと思ったからもってきたの。紙はここにおいでおくわね。ほしくなったら使って」

と、いつてそはにおき遊戯室をでた。

しばらくしてけいすけが部屋に入ってきた時、教師がもつていつてやった紙で作ったグローブが、手にはめられていたので、

「けいすけくん、ごきげん直してくれた？」

と声をかけると半分分てれているような笑いをみせ、顔をよこむけて通りすぎていった。そのあとで遊戯室へ行くと野球をして遊んでいたが、教師の姿をみると、

「ほくたち幼稚園やめるもんなあ、新しい幼稚園ほくたち四人で作るもんなあ」とけいすけがいった。

「うん、この幼稚園すぐお帰りになるもんな。いっぱい五時ぐらいまで遊べる幼稚園作るもんな」

としげおが同調していい、

「ほくが先生になるもん」

とけいすけがいった。



この幼稚園を作るといふ話になったのは、しげおとけいすけとでは思いが全然違うのではないかと思われる。けいすけが、

「幼稚園やめる」といいたしたのは、「先生のはかやろう」という気持ちの延長上にあるものだと思う。そのことを考えるとこのことばが胸につきささるような思いだった。

そのうちしげおたちは、

「やっぱりやめた。けいすけはいばるもんな」とすぐ気持ちをひるがえしていたが、けいすけだけはそうではないようであった。そのあとけいすけによく話しかけ、どうにか

けいすけの気持ちをほぐすことができたようであるが、それにしてもきょうは反省させられた一日であった。

翌日のぶおが、

「あれ、けいすけくん、もう幼稚園やめるといつていたのにきているよ」

と不思議そうな顔でいった。当のけいすけは、いつものメンバーで野球ごっこに夢中で教師はほつとした。

(五歳児 十一月二十二日)

